

このように明治・大正・昭和・平成へと発展することができました。

これも、ひとえに、皆様方の御支援の賜物でありまして、紙上をお借りし、厚く御礼申し上げます。

【表紙解説】

城下町佐伯の古き時代で、自然を象徴する最も優れた風景といえば、池船橋を前景とした家並み越しに望む城山の山容であろう。それは今も残る絵画や写真等で目にすることができる。

池船橋は明治十六年（一八八三）久部・岡の谷の内田善太郎が、私財を投じて架橋^(註)してから、年々歳々発生した水害によって幾度となく流失し、その都度民衆は不便を強いられていた。当時船頭町側には低水敷があつて船着き場として利用され、近郷の村浦から集まる渡船の乗降客で賑わっていた。

また、夏期の花火大会や住吉神社の見立細工の晩は、大勢の見物客が押し掛け、橋上は通行もままならぬ位混雑した。

昭和十八年（一九四三）九月、佐伯地方は未曾有の大水害に襲われ、市街地の殆どが浸水するといった大惨事となった。

戦後県営による河川改修（昭和二六年五月国の直轄となる）が始まり、工事の進捗と共に旧番匠川の流れは天神津留で締め切られて樋門が設置され、洪水調節が行われるようになると派川に格下げとなつて本川から外され、流量量は激減した。

そこで昭和三十九年三月から始まつた城南地域の区画整理事業と、併行して行われた中江川左岸バイパス建設用地として埋め立てられ、現代の川幅に整備縮小されてしまった。今は昔の面影など偲ぶ術もない。

この絵は工藤幸夫先生が生前好んで書かれていたもので、今回同家の承認を得て紹介した。

^(註)当時の橋長はどれ位あつたか定かでないが、前記区画整理とバイパス埋め立て前（県道当時）の橋長が九二^〇呎であつたことから、左程大差はなかつたものと思う。

解説 林 寅 喜